

平成27年度 フォローアップ研究成果報告書

NPO法人ハートリンクワーキングプロジェクト
理事長 石田 也寸志 殿

所属 国立がん研究センターがん対策情報センター
がんサバイバーシップ支援部
研究代表者 高 橋 都

平成27年度研究助成によるフォローアップ研究の成果を下記の通り報告いたします

記

研究課題名 小児期・AYA期発症がん経験者の就職活動の実態と情報・支援ニーズに関する研究
研究代表者名 高橋 都
研究要旨 本研究の目的は、小児期や思春期・若年成人期 (adolescents and young adults, AYA) 発症がん経験者の、初めての就職活動の①実体験、②役立ったことおよび妨げになったこと、③情報支援ニーズとその提供媒体を探索的に明らかにすることである。0歳～22歳までにがんの診断を受け、一般就労の就職活動を行った成人男女を対象に、半構造化面接を行った。質的分析の結果、がんや身体的変化による困難感、病名開示への葛藤、障がい者に対する就活のノウハウの欠如による困難体験が挙げられた。一方、成功体験は、就職活動前の不安や悩み、就職活動中の困難感を克服できたことと関連していた。次に、個別の問題に対して役立ったことは、自身のがん経験を知るキャリアカウンセラーへの相談や一般企業の採用スタンスを知ることであった。友人への相談やがん経験者の存在は、問題解決のきっかけや精神的支えとなった。一方、妨げとなったことは、がん経験や就職活動に対する周囲の人々の無神経な発言が挙げられた。最後に、情報・支援ニーズとして、フォローアップ受診のための有給休暇取得や勤務地の詳細な情報、がん経験者の体験談、治療継続に対する人事担当者の考えが求められ、前者2点は就活サイトへの掲載が望まれた。以上より、個々人が抱える就職活動の問題に対する情報支援や人的資源はいまだ十分ではないことが示唆された。
研究分担者・協力者所属研究機関名及び所属研究機関における職名（分担項目内容） 【研究分担者】田崎牧子 国立がん研究センター 特任研究員（研究計画立案，データ収集） 土屋雅子 国立がん研究センター 研究員（研究計画立案，データ分析） 【研究協力者】鷹田佳典 早稲田大学人間科学学術院 助手（データ収集，データ分析）
A. 研究目的 近年、治療や晩期合併症対策の進歩とともに、一般就労を果たす小児期やAYA期発症がん経験者が増加しているが、その実体験や情報・支援ニーズに関する調査は国内外を問わず極めて少ない。初めての就職は、経済的な自立のみならず、自己の確立および自己実現への第1歩となる。従って、社会人へのスムーズな移行を支援していくことは、トータルケアの見地からも意義があるといえる。 本研究の目的は、一般就労を目指して就職活動を行った、小児期やAYA期発症がん経験者を対象に、初めての就職活動で、①直面した困難体験と成功体験、②周囲の人たちとの関わりの中で役立ったことおよび妨げとなったこと、③欲しかった情報支援およびその提供媒体を探索的に明らかにすることである。
B. 研究方法 次の全ての適格基準、①0歳～22歳までにがんの診断を受けた者、②調査時に20歳以上の者、③初めての就職活動が一般就労（福祉的就労・障がい者雇用以外の就労）であった者、④日本語での読み書きに支障がない者、⑤書面での同意を得た者、を満たす者を対象に半構造化面接を実施した。協力者の募集は、小児期やAYA期発症がん経験者のための患者団体経由で行った。インタビュー当日、属性に関する情報は、アンケートによりデータ収集した。インタビューの所要時間は30分～90分間であり、同意のもと録音した。協力者には謝礼（2000円相当のQUOカード）を進呈した。逐語録を作成し、質的分析（グラウンデッドセオリー法を参考にした内容分析）を実施した。 本調査は、研究代表者が所属する施設の研究倫理審査委員会の承認および研究機関の長の研究許可を得て実施した。調査依頼書および同意書を用いて、研究の趣旨と方法、自由参加の権利、個人情報の機密性

と結果公表時の匿名性、協力辞退の権利とそれによる一切の不利益は生じないこと、同意に基づく録音であることが十分に説明された。質疑応答後、すべての協力者から書面で同意を得た。

C. 研究結果

【協力者の属性】

計14名のデータを分析対象とした。調査時の平均年齢は28.6歳（範囲：22歳～39歳）、診断時の平均年齢は11.4歳（範囲：0歳～22歳）、性別は、男女ともに7名ずつであった。がん種は、急性リンパ性白血病（4名）、悪性リンパ腫（3名）、慢性骨髄性白血病、未分化胚細胞腫、神経芽細胞腫、網膜芽細胞腫、骨肉腫、横紋筋肉腫、ウィルムス腫瘍（各1名）であった。治療後に健康問題を有した者は10名、障がい者手帳保有者が3名、調査時に抗腫瘍治療を継続中の者は1名であった。

【インタビュー結果】

① 初めての就職活動で直面した困難体験と成功体験

就職活動中の困難体験として、杖を使用しての面接場所の長距離移動や内部障害への面接担当者の無理解、がんの罹患経験が就労に与える影響を不安視した病名開示への葛藤、専門学校に障がい者に対する就活のノウハウがなく一般学生よりも労力が必要であったことが挙げられた。一方、成功体験は、就職活動前の不安・悩みや初めての就職活動中に直面した困難体験を克服し、就職活動を通して協力者が得たと感じたことと関係していた。

② 周囲の人たちとの関わりの中で就職活動に役立ったことおよび妨げとなったこと

就職活動一般に向けた実用的な情報収集の中で役立ったことは、面接時の話しやすさにつながったOB・OG訪問、就職課以外の教員による履歴書添削や面接指導であった。また、自身のがん罹患経験を知るキャリアカウンセラーからの、がん経験を自分の強みとした自己アピールの重要性、障がい者枠の活用に関する情報は有益とされた。また、患者会を通して知り合った一般企業の人々からの、病気を有する人に対する一般企業の選考方法に関する情報も有益とされた。大学の友人からの助言や患者会の友人の存在は、個々人が抱える問題解決のきっかけとなったり、精神的な支えとなったりしていた。一方、妨げとなったことは、がん治療により大学卒業が遅れたことに対する大学のキャリアカウンセラーの無神経な発言、順調ではない就職活動への親の無理解、面接時の病気に対する理不尽な質問等が挙げられた。

③ 情報支援ニーズとその提供媒体

就職活動中に必要だった情報・支援として、フォローアップ受診のための、平日の有給休暇取得の可能性および勤務地に関する詳細な採用後の情報が望まれた。また、病名開示を含めた就職活動に関するがん経験者の体験談や治療継続が必要な就活生に対する人事担当者の考えも必要とされていた。採用後の情報や病名開示に関するがん経験者の体験談は、就活サイトへの掲載が望まれた。

D. 考察

協力者の困難体験は、晩期合併症の捉え方、障がい者手帳の有無、がん治療継続の有無と関連していた。成功体験は、就職活動前の不安感や就職活動中の困難感を克服し、一般就労を果たすまでのプロセスの中で得たこととして位置づけられていた。そして、周囲の人たちとのやりとりの中で、個々人が抱える就職活動での問題に対する解決糸口の提供や後押しをしてくれる存在は、役立ったと評価された。一方、がんや思い通りに進まない就職活動に対する周囲の人々の理不尽な発言は、協力者の就職活動上の精神的なつらさの受け皿とはならず、妨げと評価された。就職活動一般に向けた実用的な情報は十分ある一方で、個々人が抱える問題に対する解決方法をがん経験者自身が見出すための情報、すなわち、がん経験者の体験談および人的資源は不足しているといえよう。

E. 結論

本研究では、小児期やAYA期発症がん経験者の初めての就職活動の実体験、役立ったことおよび妨げになったこと、そして、情報支援ニーズとその提供媒体を、インタビュー調査から明らかにした。がん治療後の晩期合併症の捉え方、障がい者手帳の有無、がん治療継続の有無が、就職活動の困難体験に関連していることが示唆された。本研究では抗腫瘍治療を継続した者が1名だけであり、治療中の者が初めての就職活動で直面する困難体験についてはさらにデータを集積する必要がある。

F. 健康危険情報 特になし。

G. 研究結果の公表

論文発表

学会発表（発表誌名巻号・頁・発行年等も記入）

その他

《備考》 特になし。